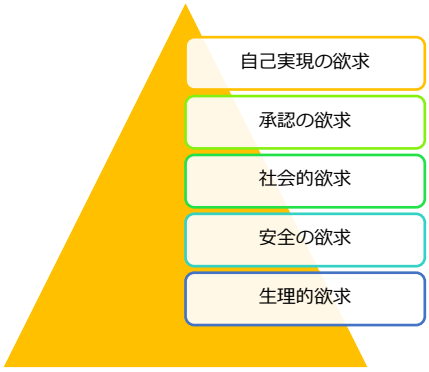
大学名：大手前大学　所属：国際看護学部　名前：笠松　由利　作成日：2023 年 12 月 25 日

ティーチング・ポートフォリオ

テーマ：脳科学と人の特性を活用した教育の実践



経験の言語化

大手前大学国際看護学部　笠松由利

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学　所属：国際看護学部　名前：笠松 由利　作成日：2023 年 12 月 25 日

１．教育の責任

私は，大手前大学国際看護学部基礎看護学領域に所属している．基礎看護学領域は，その名のごとく「基礎」を教える領域であり，看護実践のベースとなる「知識」「技術」だけでなく「態度」「考え方」「マナー」「効果的なコミュニケーション方法」「倫理」等を教授する責任を担っている．国際看護学部においては，「国際化する社会で暮らす多様な人々への看護に関する課題を教育研究の対象とし、グローバルな視野に立った教養を基礎とする知識・技能・態度を身につけ、全ての人が人らしく生きるための支援を実践できる人材養成を目的とする」を教育目標としており，グローバルな視点でもこれらの「基礎」をどのように教授するかが課題となる．グローバルな社会で活躍できる看護師に必要なのは，まずは「自分の意見や考えをはっきり述べ，ディスカッションできる」ことが挙がるであろう．そこで私は，大手前大学国際看護学部の基礎の一教員として，前述したベースを押さえつつ，自己の考えを明確に表現できる学生を育成することを第 1 優先として教育を実践している．

２．教育の理念

看護は実践の科学と言われ，対象である人（人間）に対して習得した知識や技術を発揮して実施した看護の経験を言語化し，その根拠や実践の意味を明らかにすることを求められる．そのため前述した「自己の考えを明確に表現できる学生」の育成は，必須と言えるであろう．しかしながら多様な人々と関わる社会経験が浅く，病気の罹患の経験も少なく，看護の経験の全くない若者にそれらの根拠や経験の意味を教えるには教育手法の工夫が必要である．能力は，具体的な課題を通じて得られた体験を経験に変えていく過程の中で高まっていくものであり，自分の体験や経験に自分なりの意味づけを行い，新たな行動指針や考え方を形作っていく実践が能力開発において極めて重要な鍵となる（加藤，2017）と言われており，さまざまな経験の言語化が効果的と考えている．経験を言語化し学んだ知識とつなぎ合わせることで理解が深まり，深く記憶に残ると思われる．

また看護学生は，4 年後の国家試験に向けて莫大な知識を脳内に保存しなければならない．4 年間かけて学ぶ各科目を紐づけ，統合して「看護学」を理解していくには，記憶力や理解力をつかさどる脳のしくみをいかに上手く活用できるかだと考えている．たとえば，知識としての意味記憶は特別なきっかけがないと思い出せないが，エピソード記憶にすると意識して思い出すことができる（池谷，2009）．「おもしろい」「楽しい」という情動が記憶力を高める（池谷，2009）ことから，情動を刺激する経験を授業に作り出すことが 1 つの効果的な方法といえる．

さらに教育の対象である学生は，感情や欲求をもつ人である．学習の欲求に影響を与える要因を理解し関わることが重要である．マズローの欲求 5 段階説を活用すると，まず学生の生理的欲求（睡眠，食欲等）が満たされているかを確認する．次に学生の安全を保障することである．「知らない」「わからない」ということが「言える」安全な場（授業）を作る．そして社会的欲求である「仲間との交流」の場を作り，最後に承認の機会をもつことである．そうすれば学生は，自己実現として主体的な学びを実践していくのではないかと考えている．

以上の考えに基づき，私は科目ごとに教育手法を工夫し，実践している．

３．教育の方法

担当している科目の中の 2 科目（看護のためのコミュニケーション，看護過程）について以下に説明する．

1．看護のためのコミュニケーション（1 年次通年）

本科目は 2022 年度から通年科目となり，私は第 1 回と第 9 回～15 回の授業を担当している．入学してすぐに始まる授業であることから，第 1 回目の授業は，大学の授業を印象付けるものになると考えており，主体的な学習，積極的な発言，グループでの協同学習が体験できるよういろいろな工夫を取り入れている．2023 年度は，学術提携校であるタイ チェンマイ大学の学生の海外実習受け入れ時期と重なったため，「自分の意見や考えをはっきり述べ，ディスカッションできる」能力の育成に焦点を当てた．国が異なっても，看護学生として共有できることは，患者とのコミュニケーションの難しさである．教員が模擬患者となりコミュニケーションの実践をした経験を活用して，①自己紹介を英語でする，②グループワークの学びを共有するためにチャンマイ大学の学生とコミュニケーション

できることを主な課題とした．「安全な場作り」として，どのような発表であっても否定せず受けとめ，発表したことを承認した．グループワークを取り入れ，一人の意見でなく多人数の意見をまとめて発表してもらうことで，一人の意見が否定されるというリスクを回避した．同時にグループワークは「仲間との交流」という社会的欲求や楽しいエピソード記憶も満たすことができる．授業の後半は，本授業終了後に始まる基礎看護学実習Ⅰを意識して，患者だけでなく医療者との良好なコミュニケーション，効果的なカンファレンスの仕方について考えることができるようにした．

2.　看護過程（2 年次通年科目）

2 年次後期からの実習（基礎Ⅲ実習以降）は，患者を 1 名受け持ち看護過程を展開する．この看護過程のプロセスを学習する科目であり，卒業までの各領域実習の基盤となる科目である．看護過程の展開では，既習の学修内容だけでなく自己の看護への考え方が反映され，思考プロセスを自分の言葉で説明することだけでなく，ともにチームで働く他者に理解できるように説明することが求められる．資料はカラーのイラストや図を多用して視覚に訴え，可能な限り箇条書きでポイントを記載し理解できるようにしている．看護過程を展開する事例は，後の基礎看護学実習Ⅲでの臨地実習を踏まえ，模擬電子カルテの EXCEL フォルダを作成し，電子カルテから情報を収集する作業を体験してもらう．学生が自分の考えたアセスメントを記載する 14 項目にわたる記録用紙は，臨地実習では手書きであるが，授業ではコピー＆ペースト機能を使用して課題に費やす時間を短縮できるよう配慮している．　アセスメント力向上のため，記載方法の指導を再検討したが，記載例の説明みでは理解できない学生が多く，応用ができず記録が進まないことが明らかとなった．各課題はグループを担当する教員がチェックし，コメントを記入して返却することで「承認」の機会とし，主体的学びへの働きかけをしているが，教員の負担も多く，指導方法を再検討したい．

４．教育の成果

授業アンケートの結果はまだであるが，現時点では以下のような成果を得ていると考える．

1 年生のグループ活動は，大学生活での人間関係を構築するのに役立つ．授業では自己紹介やグループワークを多く取り入れ，積極的に交流が出来るよう配慮した．結果，基礎実習Ⅰのグループで初めて話をする学生どうしでもすぐに協力体制がとれ，カンファレンスの仕方についても授業資料を持参し活用しながら活発な意見交換につながったと考える．患者，医療者とのコミュニケーション時も授業での模擬体験と記録用紙の活用が役立ち，スムーズに実習できていた．

2 年生は，基礎看護学実習Ⅱ（看護援助）と基礎看護学実習Ⅲ（看護過程の展開）と看護過程の授業を関連させて進めたことにより，対象となる事例に適した援助を考える必要性や方法について，徐々に理解が深まったように感じる．また IT スキルとして，EXCEL を使い慣れていない学生も看護過程の授業で EXCEL を活用したことで，EXCEL を使いこなすスキルも向上させている．

５．改善への努力と今後の目標

「看護のためのコミュニケーション」は今年度から接遇と関連させた 15 コマの授業となった．接遇部分の担当者と協力して，質の高い看護師の育成に向けて授業方法を検討し実施しているが，コミュニケーションスキルの修得に焦点があたりがちになるため，まとめテストの結果を見ると根拠や理論の理解が乏しいため，次年度は授業展開を検討したい．

「看護過程」の授業は，限られた時間で効率良く看護過程を展開するスキルを習得してもらう必要がある．時間数が少ないことから疾患の理解よりも看護過程の展開を優先してきたが，今年度，疾患の理解が状態の理解にもつながることが示唆されたので，授業の前半に疾患に関する課題の提示を取り入れたが，病態学との授業の関連もあり，大きな成果は見られなかった．次年度，学生が多用する IT の活用も検討していきたい．

【添付資料】

なし

引用文献

池谷　裕二（2009），記憶力を強くする，講談社.

加藤洋平（2017），成人発達理論による能力の成長　ダイナミックスキル理論の実践的活用法，日本能率協会マネジメントセンター.

厚生労働省（2019），看護師教育の技術項目と卒業時の到達度（案），

https://www.mhlw.go.jp/content/10801000/000475666.pdf（2021/12/13 参照）